

武士の落ち着き

モーガン・フーパーによる再話

ヒロユキは、4代にわたり家に受け継がれてきた茶わん、抹茶を供する器に湯を注ぎました。彼は、その使い込まれた美しさ、その不完全な完全さを見てほほ笑みました——輪郭、不規則性、そして繊細な貫入のすべてが物語を語っていました。彼は注意深く左の手のひらで包み込むように茶わんを持ち、右手の白い布で水気を拭き取りました。それから竹の茶さじを取り、ひいた抹茶を2杯、茶わんの底に入れ、新たな湯を入れました。彼が繊細な茶せんで湯をかき混ぜると、調和の取れた甘さと苦さのある香りが部屋を満たしました。最後に、1人目の客人に座礼をし、茶わんを差し出しました。このようにして、楽々とこなしているように見える楽しさと熟達さをもって、ヒロユキは所定のお点前——茶をたて、振る舞う儀式化した作法——を披露しました。

封建時代の日本では、江戸——現代の東京——の町は活気ある大都市でした。商人や職人、漁師や農民、行商人、ろくでなし、その間のあらゆる人々が、多くの混雑した道や市場を歩き回っていました。都会の生活の騒がしさから逃れるために、高位の人々は、しばしば俗世間から離れた茶室の開かれた戸へと通じる露地の小道に足を向けました。そこで、彼らは質朴で上品な茶室の雰囲気を楽しみました。美しい生け花の芸術性を称賛し、壁に掛けられた書道の巻き物、掛け軸に書かれた美德に思いを巡らせました。彼らは一息ついて、差し出された茶をすすり、心が静寂に包まれるに任せました。

先人の芸術を学ぶことに人生をささげてきたヒロユキは、今、52歳という円熟期を迎え、江戸の卓越した茶道の名人の一人として広く認められていました。彼は、幕府高官、裕福な商人、奉行所の上層役人などに茶をたて、常にすべての客人に細心の注意と敬意を払いました。

その特別な日に、位の高い5人の侍が客人の中にいました。その侍たちは、日本の社会で最も敬われるメンバーに入る人々で、奉仕と勇敢さの象徴的存在でした。彼らは称賛されかつ恐れられていて、茶道の名人もよく知っていたように、わずかでも彼らに逆らうことは最悪の処罰につながり得ました。

最後の茶が差し出された時、最初の4人の侍は快く受け取りました。ヒロユキは次に5人目の侍、短気で悪名高い武士、イシダの方を向きました。茶道の大家は彼に座礼をし、茶を差し出そうと手を伸ばしました。ヒロユキがそうした時、イシダはヒロユキに気づかず、辛口の発言をしようと仲間の方へ腕を伸ばしました。ヒロユキは、武士に当たられるのを素早くよける十分な意識を持っていましたが、彼がよけたことで、熱いお茶の滴が侍の伸ばした手に落ちました。

腕を引っ込めて、武士は雷のような声を出しました。「この愚か者！貴様がやったことを見よ！」

ヒロユキはひざまずき、深くひれ伏しました。彼にとって実に恐ろしいことに、まだ度を越して激怒していた侍はすぐさま立ち上がり、彼の着物の胸ぐらをつかみました。

「ばか者！これが貴様の侍への敬意か！この無礼がために、わしはここで今すぐ貴様を成敗することができる——しかし…」と、侍は間を置きました。小さな笑みが彼の顔に浮かびました。「…貴様の恐怖がわしを楽しませる。明日の夜明け前、町の外に武器を持って来い。そして、森の中でわしと果たし合いをするのだ。もし貴様が来なかったら、貴様の家名はおとしめられるだろう」

そう言うと、侍は引き戸から出て行きました。他の4人も後に続きました。

午後、ヒロユキは茶室を閉めて家に戻りました。彼はそれから2時間、ぼんやりと過ごしました。茶道の名人は、人生の中で武器など手にしたことはありません！ 侍との果たし合いなど愚かなことだと分かっています。思案に暮れ、逃げる手段を探しました。

「お奉行様に状況を説明することができるかもしれない…私の代わりに戦ってくれる他の侍の助けを求められるかもしれない…あるいは、あるいは、もしかしたら私は…」

時がたつにつれて、置かれた状況のむなしさは行き止まりであることを明らかにし、彼は追い込まれたと感じました。しばらくして、彼は心の迷路で行き止まりました。

「いや、いや、他に何もできない。たとえ私の命が失われたとしても、私は家名を守らなければならない。あの方に会わなければならない」。この言葉に続く沈黙には、憂鬱(ゆううつ)と決意の等しい重みが加わりました。そのぬかるみにはまった空気の中で、茶道の名人にある考えが浮かびました。

「オオタ先生、武芸の師…そうだ、この先に住むこの老師の所に私は行くべきだ。先生は賢くて親切だ。彼は私の唯一の可能性だ」

ヒロユキはこの望みが薄いものであると知っていました。それでもなお、彼は通りを下り、謙虚に先生の戸をたたきました。

オオタ先生は質素な茶色の着物を着て戸口に現れました。茶道の名人は板挟みの真ただ中にいながらも、年老いた武士のありのままの謙虚な態度に感嘆せざるを得ませんでした。

ヒロユキは頭を下げました。「オオタ先生、午後にお邪魔したことをお許しください、しかし、私はひどい窮地に陥っています…」

ヒロユキが窮状について話す間、先生は耳を傾け、時々彼の唇から「うーん」という声が発せられました。それから彼は言いました。「侍の伝統を汚すのはイシダのような高慢なばか者である。高潔な武士が一人いれば、うぬぼれと自己肥大の中で道に迷う武士が二人いる」

ヒロユキは深く頭を下げました。「オオタ先生、私を助けていただくことは可能でしょうか？私を勝利へと導く秘技、奥の手はあるでしょうか？」

オオタ先生は思いやりと率直さをもって答えました。「知っての通り、技の形は完成するまでに一生かかる。生涯戦ってきた侍を倒すために、たった半日でどうやって教えることができるというのか？ 今、そなたが目指すべきは、残りの時間を尊厳をもって生きることだけだ」

ヒロユキは、深く息を吸い込み、気を引き締めました。「では、私は自分の運命を受け入れます」と、彼は言いました。

先生はこの勇気ある反応に満足して見え、すると突然、名案がひらめいて目を輝かせました。「ヒロユキ名人」と、彼は言いました。「私がここ江戸に住んでいる間ずっと、私はそなたの茶室について聞いたことはあったが、訪れる時間がなかった。そなたの状況を知るにつけ、そなたの技を見たことがないのは大きな損失だと思う。時間は減りつつあるが、老人の願いを聞き入れてはくれないか？」

ヒロユキはためらうことなく、「オオタ先生、この世での私の最後の日に、先生に供することができるのは、最高の名誉でございます」と答えました。

先生はほほ笑んで言いました。「それでは準備をするように。間もなく伺おう」

1時間後、オオタ先生は通りを歩いて露地を抜け、茶室に行きました。弓形の入り口をくぐると、そこには彼を迎えるためにヒロユキがいました。茶道の名人は今一度礼をし、先生はお点前の作法が始まると同様に応じました。

オオタ先生は見守る中で、所作をする時のヒロユキの変容に気づかざるを得ませんでした。茶道の名人の姿勢、呼吸、あり方は、湖畔にたたずむサギのように穏やかで集中していました。彼の繊細な動きにはこの静けさが満ち、彼が最初の茶わんに注いだ時、静寂の感覚が茶室に浸透しました。

「平常心」と、オオタ先生は茶を受け取りながら言いました。

「先生？」 ヒロユキは、その言葉を知らなかったので、尋ねました。

「平常心、武士の落ち着いた境地、人生の変動と混乱にもかかわらず持ちこたえる中庸の境地。世界は燃えていようとも、そなたの心は落ち着いている。そなたの心は静かだ」

「お許してください、先生、私にはまだ理解できません」

「1回の剣の振りが1000回の剣の振りになる。一つの技に熟達することは、自分に対する不屈の信念の精神を確立する。それはすべての技の熟達への道を開くのだ」

先生はそれから茶道の名人の近くに身を乗り出して、彼の目をのぞき込んで続けました。「私の戸をたたいた男は疑念に満ちていた。しかし、そなたの所作を観察した時、長い間聞き

及んでいた非常に著名な達人が見えた。そなたがまだ知らないことで、私が教えられることは何もない。明日の朝、そなたがすべきことは、茶を一杯差し出すように剣を抜くことだけだ」

オオタ先生が去る時、ヒロユキは露地の緩やかに曲がりくねった小道を一緒に歩きました。数歩歩いた後、二人は秋の訪れの兆しに気づいて立ち止まりました。空気は冷たく爽やかで、二人を囲む木々の紅や黄色に色づいた葉が、きらめく秋の光の中ではらはらと舞っていました。

先生は半ば独り言のように言いました。「この実に美しい人生は、風に舞う木の葉のように、一瞬のうちにやって来ては去っていく。その間のあらゆることは夢だ」

そしてヒロユキの方を向いて、予備の刀を差し出し、どう腰に差すかを教え、「一心に戦いなさい」と言って去りました。

翌朝、果たし合いが行われる森の空き地の上方の、天蓋のような葉の茂みにだいたい色の光が差し込みました。それは辺り一面に交差する影を作りました。

インダは既に来ており、イライラした様子で歩き回っていました。果たし合いの立会人を務める侍や高位の者たちにこう豪語しました。「やつが来る見込みはない、意気地なしだ。来るはずがない」

インダが話しながら振り返ると、遠くに朝日の逆光を受けてぼんやりと輪郭が写し出されたヒロユキが、こちらに向かってしっかりと歩いて来るのが見えました。

茶道の名人は侍から9メートルばかりの所で止まり、最初に立会人たちに、それからインダに礼をしました。茶道の名人は一言も発しませんでした。

インダは一瞬、ヒロユキはどこか違って見えると思いましたが、その考えを急いで追いやりました。インダは立会人たちに礼をし、ぞんざいに茶道の名人にうなずきました。

威勢を誇示し、インダは刀を振り回し、「少なくともおまえは尊厳を持って死ぬ勇気だけはある！」と叫びました。

ヒロユキの手が刀のつかに掛かった時、彼はオオタ先生の教えの確信を得ました。長年茶道の精進を通してヒロユキが育んできた正確さ、平静さ、そして忍耐力が、彼の全存在に染み込んでいました。彼は、平常心という広がる静けさの境地に没入するのを感じました。先に体験した恐れ of 痕跡は全くありませんでした。彼の心、呼吸、そして魂に残ったのは——静寂だけでした。

ゆっくりと、慎重に、そしてやすやすとヒロユキは刀を抜き、対戦者に向けました。それは自分自身に揺るぎない信念がある者の静かなしぐさでした。そして行く手に何が起ころうと受け入れて、彼は待ちました。

侍はすぐに平静さを失いました。侍が即座にののしった同じ人物ではありませんでした。目の前にいるのは全くの別人でした。

ヒロユキと目を合わせながら、インダは注意深く前進しました。インダが一步踏み出すごとに、茶道の名人は自分の構えを維持しました。

「こやつには恐れがない」と、侍は思いました。「こやつの構えを崩し、精神を乱せることは何もない…。身震いし、インダは自分の刀をさやに収めました。

「参った。わしはたいへんな間違いを犯した。おまえは私が考えていたような人物ではない。二度と会うことはないだろう」。そう言うと、侍は茶道の名人と立会人たちに礼をし、立ち去りました。

茶道の名人は視線を空へと向け、こずえの上に昇る太陽を見詰めました。

心の中で、彼は自分自身の内なる熟達の価値、武士の落ち着いた道を教えてくれた先生に礼をしました。

